



神奈川宿台ヨリ十五景見渡御行列之図（地名を加筆） 1863年 横浜中央図書館所蔵

特集 リベンジ 神奈川

神奈川宿、神奈川湊 知っていますか？；神奈川県の名の「神奈川」はここから来ているんですよ。でも、神奈川の存在は、歴史の彼方の霧の中に隠されています。5月14日のNHK「プラタモリ」でも取り上げられて、ほんの少し蘇ったけれど、さらに今一度「神奈川」を歴史の彼方から呼び戻しましょう。プラタモリでは放送されなかったけれど、神奈川宿の案内人の一人だったジャン・ヨコハマ氏がここでリベンジします！

神奈川湊（みなと）は横浜港の大先輩

ジャン・ヨコハマ



中世から戦略上の要だった神奈川湊

江戸時代に整備されて大いに賑わった宿場町としてのイメージが強い神奈川宿、実は中世から戦略上の要として、物流の要衝として栄えた港町でした。そこが宿場となる訳ですから、ますます人口は増え、大きな町になっていきました。幕末、横浜開港の直前には約1500軒、人口約6500人が暮らしていたと伝わります。

←神奈川沖浪裏 葛飾北斎 1829年-1832年

寒村でもなかった横浜村

一方、当時の横浜は約100戸、約500人の半農半漁の小さな村でした。(横浜村を寒村と表現する記述をよく目にしますが、100戸あれば大きくはないが寒村は言い過ぎでしょう。横浜市歌の「昔思へば 苦屋の煙、ちらりほらりと立てりしところ・・・」のイメージが強すぎたのかも知れません)

栄えていた神奈川宿(湊)



神奈川宿(湊)を語るときにいろいろな性格があることに留意することが必要でしょう。宿場だけじゃない、湊を中心とした交易の地であり、小机城(飯田城)の管理下の時代があり、関東沿岸部の要衝としての権現山城など、キーワードはいくつもあります。さらに加えれば、浦島太郎伝説や神奈川台場、神奈川の地名の由来、開港時の各国領事館、米軍の占領とベトナム戦争反対運動など、まだあるかも知れません。

「神奈川宿」歌川広重『東海道五十三次』より。
次の画像は客引き部分を拡大したもの



ど、まだあるかも知れません。

ここでは湊としての性格について少し述べてみたいと思います。神奈川 湊には漁港としての性格と全国の廻船が寄港する交易港としての性格がありました。

交易は江戸湾内にとどまらず、六浦や上方との交流など全国規模のネットワークが形作られ、神奈川湊に大きな富をもたらしました。相州産の小麦や大豆などがここに集められ出荷されました。逆に醤油や塩などはここから関東の内陸部へ運ばれました。また、江戸への中継地の役割も果たしました。神奈川湊には廻船問屋が軒を連ね賑わいました。多くの船が出入りすると船乗りたちを相手にする商売も繁盛します。つまり、旅籠と飯盛り女です。さらに宿場町とし

ての町を維持するためには農業や漁業に従事する人達も大勢必要となります。 こうしてにぎわいの町が形成されていきました。

そんな神奈川宿も横浜が開港場となり、貿易港として発展するにつれ中心地は横浜に移り、さらに横浜市域が拡張、神奈川をも飲み込むこととなります。



高島台から撮影した平成 28 年元旦の富士山（トップの浮世絵とだいたい同じ方向から見ている）

撮影：高島台に在住の荒井聖輝氏